様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月 ２８ 日現在

機関番号：５４５０２
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１８５００

研究課題名（和文）用字法における個と継承に関する研究

研究課題名（英文）Imagawa Ryoshun's Kana Preferences in His Own Work and Interpretations of Classics

研究代表者
林田　定男（HAYASHIDA, Sadao）

神戸市立工業高等専門学校・その他部局等・准教授

研究者番号：５０７１３６８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：文字・表記研究の根幹にかかわる、個の問題の解決へ向け、今川了俊自筆本『厳島詣記』（書記資料）と自筆書写本『源氏物語』（書写資料）との比較調査を行った。その結果、これらの資料の用字傾向は完全には一致しないことが確認された。書記資料にのみ見られる仮名字体は筆者の個性の表出、書写資料にのみ見られるそれは親本表記の影響によるものと推測される。また、了俊は冷泉派歌学を体系づけ、著書『言塵集』に藤原定家著『下官集』所載の「定家仮名遣」の実例を示す箇所を引用している。したがって、了俊は定家仮名遣を遵守する意識が高いように推察されるが『厳島詣記』の仮名遣実態においては表記規範意識の連続性が認められなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今川了俊自筆本『厳島詣記』（書記資料）および自筆書写本『源氏物語』（書写資料）の文字調査を行った結果、これらの資料の用字傾向は完全には一致していないことが確認された。前者にのみ見られる仮名字体は筆者の個性、後者にのみ見られるそれは親本表記の影響によるものと推測される。また、了俊は定家仮名遣を遵守する意識が高いように推察されるが『厳島詣記』の仮名遣実態においては、その仮名遣いが遵守されていなかった。

研究成果の概要（英文）：To solve the fundamental problems for the study of writing and notation, a comparative study was conducted between Imagawa Ryoushun’s book, “Itsukushimamoudeki,” and his transcription of “The Tale of Genji.” In conclusion, it was confirmed that the preferred character selections in these materials do not match perfectly. It was assumed that the kana characters found only in the original manuscript were influenced by the author's preferences, and those found only in the transcription were influenced by the parenthetical script. Moreover, Ryoushun systematized the study of Reizei’s school of poetry, and cited in his book “Genjinshu” an example of “Teika kana orthography” in Fujiwara Teika’s book “Gekansyu.” Therefore, it was expected that Ryoushun had a high awareness of observing the kana orthography advocated by Teika.However, Ryoushun did not actually continue to follow the Teika’s style in his book.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語学　表記　自筆　書写　仮名　用字法　今川了俊　厳島詣記

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## １．研究開始当初の背景

文献資料の成立の前提として、書記（書写）者、また多くの場合、親本（書本）が存在する。ところが、これまでの当該分野の研究（個別研究）では、この点が顧みられていない。「□□の用字法」という研究タイトル（テーマ）の□□に、人名が入っても書名が入っても同じことである。たとえば、ある有名な人物が書写した『源氏物語』の用字実態を調査し、「特異な用字法」を発見したとする。しかし、それが書写者に由来するものであるのか、親本（書本）に由来するものであるかは判然としない。特定の人物が複数の自筆書写本を残し、それらに共通する傾向が認められればこの人物の用字法といえるが、これらの親本の書写者がひとりであった可能性は排除できない。そのため、実際のところは、この場合でも「特異な用字法」の主は定かではないのである。報告者は藤原定家筆資料に関する研究を中心に行ってきたが、そのなかで、この研究の根幹にかかわる問題に気付いた。それ以降、未知の部分が多く残されている、表記規範の継承について関心を持っていた。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、（A）書記における個の問題の解明、（B）藤原定家の用字法の享受に関する問題の解明である。換言すると、前者は研究の根幹にかかわる、書記における個の問題に対し、ひとつの答え（モデル）を提示すること、後者はほとんど手つかずの分野である藤原定家の用字法の享受実態一斑を解明するということである。以下、それぞれを具体的に述べる。

（A）書記における個の問題の解明

中古・中世に成立した文学作品の原本のほとんどが失われていることは周知の事実であるが、それらの現存テキストの親本（書本）が失われているのも常である。研究の蓄積がある藤原定家書写本を具体例として示すと、定家が書写した『古今和歌集』は「伊達家旧蔵無年号本」「嘉禄二年四月書写本」が現存するが、『古今和歌集』の原本は夙に焼失し、定家が書写した先の 2 つのテキストの親本も現存しないということである。そのため、これらの用字実態を公表することについては、注意が必要である。定家著『下官集』に記載されている「定家仮名遣」または定家筆資料に共通して見られる用例を除いては、用字法に特徴が認められたとしても、それは書写者に帰すべき事柄なのか、資料（親本）に帰すべき事柄なのか、判別できないからである。

テキストとその親本がともに現存するというケースは稀であることに加え、奥書は元奥書の可能性があるため直ちに信用できるものではない。そのような事情により、個の解明にあたっては新たなアプローチが必要となる。用字法における「個」の抽出方法を提案し、その結果（モデル）を提示する。このことは、これまでの研究成果の再評価（視座創出）につながる。

（B）藤原定家の用字法の享受に関する問題の解明

「この道にて定家をなみせん輩は、冥加もあるべからず、罰をこうむるべき事なり」とは、『正徹物語』の著名な冒頭で、中世期以降における定家の神格化を象徴する一文となっている。このような流れのなかで、『下官集』の掲出語を大幅に増補した、行阿による『仮名文字遣』が登場する。この書は『行阿仮名遣』『定家仮名遣』とも呼ばれ、多くの写本が現存し、近世期には木版本で刊行もされている。この状況から推すと、「定家の仮名遣」は和文を記す規範として機能していたように考えられる。中世期以降に書記・書写された和文資料の仮名遣が「定家の仮名遣」に一致する傾向があるということが通説となっているが、膨大な資料に比して、研究の蓄積が不十分であると言わざるをえない。そこで、まずは中世初期（定家の神格化形成期）の資料における仮名遣の一端を解明、すなわち「定家の仮名遣い」という表記規範の実効性を検証する。

## ３．研究の方法

上記 2 つの目的の効率的達成に寄与する可能性の高い、無二の資料が存在する。14 世紀に活躍した、武将であり歌人でもある今川了俊が遺した資料である。了俊は藤原定家の曾孫、冷泉為秀に師事し、正徹の師でもある。彼の著『言塵集』には定家の名が散見され、『下官集』の仮名遣用例の引用も見られる。その了俊は「定家の仮名遣い」を実践していたのだろうか。実効範囲はどうなっているのであろうか。幸運にも、了俊には自筆資料、自筆書写資料ともに伝わっている。たとえば、前者としてはセンチュリー文化財団所蔵（慶応義塾大学附属研究所斯道文庫寄託）『厳島詣記』が、後者としては専修大学図書館所蔵『源氏物語』、冷泉家時雨亭文庫所蔵『撰集抄』などが挙げられる。自筆本、自筆書写本それぞれの仮名遣をつぶさに調査・比較することによって「定家の仮名遣」の実践・実効範囲が明らかになり、さらに仮名文字遣（異体仮名の使い分け）を全調査し、それらを比較することによって、親本表記の影響の問題が解決できる。自筆本、自筆書写本の比較分析という新たなアプローチにより、「個人（了俊）の用字法」を抽出することができるのである。

## ４．研究成果

研究成果は、以下の 4 種に大別される。すなわち、「仮名遣」「異体仮名の使い分け」「漢字使用」「本文異同」それぞれに関することである。以下、順に報告する。

### ４.1　仮名遣に関すること

仮名遣いの対象となる語をいくつか取り上げ、書記における了俊の仮名遣いと「定家のかなづかい」「定家かなづかい」「歴史的かなづかい」、それぞれとの相違点を示す。

次表の右端のアルファベットは、それぞれ以下の相違点を指す。

A……すべての仮名遣いに一致するもの
B……「定家のかなづかい」「定家かなづかい」に一致するもの（「歴史的かなづかい」のみ不一致）
C……「定家のかなづかい」「歴史的かなづかい」に一致するもの（「定家かなづかい」のみ不一致）
D……「歴史的かなづかい」のみに一致するもの（「定家のかなづかい」「定家かなづかい」不一致）
E……すべての仮名使いに不一致のもの

なお、「定家のかなづかい」は大野晋（1982）所収の「藤原定家の仮名遣実例」および嘉禄二年本『古今和歌集』、「定家かなづかい」については、今野（2016）所収の清泉女子大学附属図書館蔵『新撰仮名文字遣』（811・56・Y86）などに拠る。

① オ／ヲの使い分け

下表から明らかなように、了俊の仮名遣いはどの仮名遣いとも一致するものではない。また、「追風（負風）」では、表記のゆれも認められる。

| 厳島詣記 | 定家のかなづかい | 定家かなづかい | 歴史的かなづかい | 相違点 |
|---|---|---|---|---|
| おき（沖） | おき | おき | おき | A |
| おし（押） | をし | をす | おす | D |
| おとら（劣） | おとら | をとる | おとる | C |
| おの／＼（各々） | をのをの | をの／＼ | おのおの | D |
| おひ風／をひ風 | おひかせ | をひかせ | おひかせ | - |
| おひ（生） | おひ | おひいつる | おふ | A |
| およふ（及） | をよふ | をよふ | およぶ | D |
| おら（織） | をら | をりへのつかさ | おる | D |
| をそく（遅） | をそく | をそし | おそし | B |
| をなし（同） | おなし | おなし事 | おなし | E |
| をや（親） | おや | をや | おや | C |

② エ／へ／ヱの使い分け

下表から明らかなように、了俊の仮名遣いはどの仮名遣いとも一致するものではない。また、「見え」では、表記のゆれも認められる。

| 厳島詣記 | 定家のかなづかい | 定家かなづかい | 歴史的かなづかい | 相違点 |
|---|---|---|---|---|
| おぼえ | おぼえ | おほえて | おぼえ | A |
| みえ／みへ（見） | みえ | みえて | みえ | - |
| こゑ（越） | こえ | こえたる | こえ | E |

③ ヒ／ゐ／イの使い分け

下表から明らかなように、了俊の仮名遣いはどの仮名遣いとも一致するものではない。

| 厳島詣記 | 定家のかなづかい | 定家かなづかい | 歴史的かなづかい | 相違点 |
|---|---|---|---|---|
| いわを（巌） | いはほ | いはほ | いはほ | E |
| まいる | まいる | まいる | まゐる | B |
| ゐ（居） | ゐ | きゐる | ゐる | A |
| さかゐ（境） | さかひ | さかひ | さかひ | E |

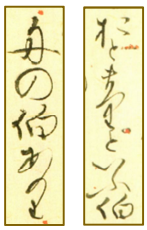
### ４.２　異体仮名の使い分けに関すること

後掲の表「書記資料／書写資料における異体仮名の使い分け」のとおり、『厳島詣記』には 109 の仮名字体（字形）、『源氏物語』には 111 の仮名字体（字形）が見られるが、内実は異なる。

『厳島詣記』にのみ見られる字体……10 字種：「伊/計 b/所/二/日/万/無/屋/羅/恵」
『源氏物語』にのみ見られる字体……11 字種：「阿/盈/衣 b/起/倶/希/遣/佐/奴/祢 b/婦」
主用仮名字体が異なる仮名（音）……5 音：「ケ/ヌ/ネ/ロ/ワ」

追調査の必要はあるものの、書記資料と書写資料との間には仮名用字に相違があった。書記／書写時期の問題等検討すべき事柄もあるが、比較により判明した書記資料の特徴は個性の表出、書写資料の特徴は親本表記の影響と考える。

## ４.３　漢字使用に関すること



『厳島詣記』には漢字「伯」が 2 例見られる。右に掲げた図版のとおり、「舟の伯あり」（3 月 12 日）、「おどまりといふ伯」（3 月 14 日）という文脈であらわれるが、現行の基準では「泊」があてられるべきものである。誤字として安易に処理できないことは認識しているが、この事象の解釈については、今後の課題である。なお、宮内庁書陵部蔵『鹿苑院殿厳島詣記』および『源義満公厳嶋詣記』（共に内容は厳島詣記）の当該箇所は「泊」である。

## ４.４　『厳島詣記』の本文に関すること

『中世日記紀行文学全評釈集成』第 6 巻に収められている『鹿苑院殿厳島詣記』（底本は宮内庁書陵部蔵『鹿苑院殿厳島詣記』で彰考館文庫本・扶桑拾葉集所収本により校合）の 3 月 7 日条の冒頭は次のようにある。

> 七日は是に留まらせ給ふ。此所の形は、北に向かひて、渚に沿ひて、海人の家々並べり。東は、野山の尾の上北ざまに長く見えたり。磯際に続きて、古りたる松が枝など室の木に並びたり

同書の校異によると、この部分に大きな異同は認められない。しかし、「東は、野山の尾の上北ざまに長く見えたり」に続き、了俊自筆本『厳島詣記』では下に示すとおり、「南は山つゞけり。西の山ぎは」という文言が見られる。現存諸本の書承過程を遡ると、自筆本に至るまでに共通の祖本が存在していたことが推測される。

> 七日は是にとゞまらせたまふ。此所のカタチは、北にむかひて、なぎさにそひて海人の家々ならべり。ひんがしは、野山のおのへ北ざまに長く見えたり。南は山つゞけり。西の山ぎは磯ぎはにつゞきて、ふりたる松が枝などむろの木にならびたり

なお、上の翻刻文には適宜濁点や句読点を付した。ただし、赤字は原文に濁点が付されている箇所である。

［参考文献］


浅田　徹（2000）「下官集の定家‐付・大東急記念文庫蔵「定家卿模本」翻刻‐」『国文学研究資料館紀要』第 26 号
（2001）「下官集の定家‐差異と自己‐」『国文学研究資料館紀要』第 27 号
荒木　尚（1977）『今川了俊の研究』（笠間書院）
（2008）『『言塵集』―本文と研究―』（汲古書院）
伊井春樹（1984）「了俊筆『源氏物語』の本文と書入注の性格」寺本直彦編著『『源氏物語』とその受容』
池上禎造（1984）『漢語研究の構想』（岩波書店）
伊藤敬・荒木尚ほか（2004）『中世日記紀行文学全評釈集成　第 6 巻』（勉誠出版）
遠藤邦基（2010）『国語表記史と解釈音韻論』（和泉書院）
大野　晋（1982）『仮名遣と上代語』（岩波書店）
小野正弘（1994）「『正徹本 徒然草』の和語のかなづかい」『国語論究 第 5 集 中世後の研究』（明治書院）
蔵中スミ・小早川健編（1995）『中世紀行文学選』（翰林書房）
慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編（2010）「厳島詣記」『図説 書誌学―古典籍を学ぶ』（勉誠　出版）
今野真二（2016）『仮名遣書論攷』（和泉書院）
築島　裕（2014）『歴史的仮名遣い　その成立と特徴』（吉川弘文館）
中田武司（1982）「今川了俊筆　源氏物語　（空蝉巻）　解題」（専修大学出版局、1982）
新美哲彦（2008）『源氏物語の受容と生成』（武蔵野書院）
安田　章（2009）『仮名文字遣と国語史研究』（清文堂出版）
矢田　勉（2012）『国語文字・表記史の研究』（汲古書院）


［テキスト・資料］


センチュリー文化財団所蔵（慶応義塾大学附属研究所斯道文庫寄託）資料『厳島詣記』（セ 2322）
専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊『源氏物語（空蝉）　今川了俊筆』（専修大学出版局、1982）



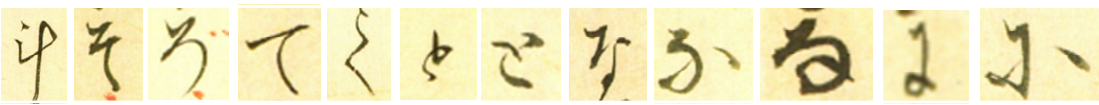
付記 本研究を遂行するにあたり、関係諸機関にお世話になりました。とりわけ、翻刻・図版掲載の許可もくださった、佐々木孝浩文庫長をはじめとする慶應義塾大学附属研究所斯道文庫の方々にはたいへんお世話になりました。記して深甚の謝意を表します。

# 書記資料／書写資料における異体仮名の使い分け

| 音 | 厳島詣記 | 源氏物語 |
|---|---|---|
| ア | 安(50) | 安(70) **阿(1)** |
| イ | 以(100) **伊(1)** | 以(104) |
| ウ | 宇(56) | 宇(94) |
| エ | 衣 a(5) | **盈(11)** 衣 a(9)<br>**衣 b(5)** |
| オ | 於 a(30)於 b(13) | 於 a(33) 於 b(7) |
| カ | 可(205) 閑(31) 加(7) | 可(168) 加(31) 閑(22) |
| キ | 幾 a(113) 幾 b(2) | 幾 a(105) **起(11)** 幾 b(2) |
| ク | 久(73) | 久(90) **倶(1)** |
| ケ | 気(29) 計 a(28)<br>介(25) **計 b(3)** | 計 a(33) 気(19) **希(13)**<br>介(13) **遣(6)** |
| コ | 己(89) 古(2) | 己(57) 古(9) |
| サ | 左(76) | 左(90) **佐(1)** |
| シ | 之(122) 志(77) | 之(166) 志(72) |
| ス | 春(20) 須(14) 寸(8) | 春(46) 寸(19) 須(3) |
| セ | 世(75) | 世(25) |
| ソ | 曽 a (27) 曽 b(12)<br>楚(8) **所(1)** | 曽 a(20) 楚(18) 曽 b(13) |
| タ | 多 a(124) 堂(52)<br>太(5)多 b(1) | 多 a(99) 堂(58) 太 (7)<br>多 b(1) |
| チ | 知(31) 地(6) | 知(40) 地(2) |
| ツ | 徒(42) 川 a(17) 川 b(10) | 徒(56) 川 a(30) 川 b(18) |
| テ | 天 a(143) 天 b(12) | 天 a(143) 天 b(4) |
| ト | 止 a(213) 登(21)<br>止 b(8) | 止 a(220) 止 b(6) 登(5) |
| ナ | 奈 a(76) 奈 b(38)<br>那(17) 奈 c(10) | 奈 a(81) 那(45)<br>奈 b(24) 奈 c(17) |
| ニ | 尓 a(148) 仁(39)<br>尓 b(12) **二(7)** 丹(1) | 尓 a(124) 仁(22)<br>丹(7) 尓 b(2) |
| ヌ | 怒(17) | **奴(27)** 怒(1) |
| ネ | 年(15) 祢 a(3) | 祢 a(22) 年(5)<br>**祢 b(1)** |
| ノ | 乃 a(184) 乃 b(43)<br>能(20) | 乃 a(96) 乃 b(17) 能(5) |

| 音 | 厳島詣記 | 源氏物語 |
|---|---|---|
| ハ | 八(81) 盤(59) 波(10)<br>者(2) | 八(99) 者(34) 盤(34)<br>波(11) |
| ヒ | 比(69) **日(1)** | 比(76) |
| フ | 不(105) | 不(43) **婦(9)** |
| ヘ | 部(27) 遍(21) | 部(65) 遍(5) |
| ホ | 保(36) 本(29) | 保(32) 本(14) |
| マ | 末(163) 満(4) **万(1)** | 末(104) 満(4) |
| ミ | 三(36) 見(16) 美(3) | 三(35) 美(10) 見(10) |
| ム | 武(33) **無(3)** | 武(22) |
| メ | 女(40) 免(1) | 女(37) 免(2) |
| モ | 毛 a(71) 毛 b(15) | 毛 a(86) 毛 b(18) |
| ヤ | 也(44) **屋(3)** | 也(54) |
| ユ | 由(50) | 由(18) |
| ヨ | 与 a(28) 与 b(20) | 与 a(25) 与 b(7) |
| ラ | 良(93) **羅(3)** | 良(110) |
| リ | 利(193) 里(23) | 利(80) 里(35) |
| ル | 留 a(59) 累(20)<br>留 b(12) 類(9) 流(5) | 留 a(92) 留 b(11)<br>類(6) 累(4) 流(3) |
| レ | 連(21) 礼 a(21)<br>礼 b(3) | 礼 a(47) 連(42)<br>礼 b(6) |
| ロ | 呂(13) 路(10) | 路(15) 呂(4) |
| ワ | 王(10) 和(6) | 和(26) 王(21) |
| ヰ | 為(6) 井(3) | 為(8) 井(2) |
| ヱ | **惠(1)** | |
| ヲ | 遠(51) 越(23) | 遠(110) 越(1) |
| ン | 无(5) | 无(21) |

・漢字（仮名字母）の横の数字は用例数である。
・「川ａ」「川ｂ」のように、字母の横にアルファベットの付いたものは、字母は共通であるが崩し方により、字形が異なっているものを表す。以下、このような例を列挙し、あわせて特徴を記す。
衣 a：縦長の「え」／衣 b：横長の「え」、於 a：「お」と同形／於 b：漢字「於」とほぼ同形、川 a：「つ」と同形／川 b：漢字「川」と同形、計 a：「け」と同形／b：下図版参照、天 ab：下図版参照、止 ab：下図版参照、奈 abc：下図版参照、尓 ab：下図版参照、祢 a：漢字「祢」と同形／b：「ね」とほぼ同形、乃 a：「の」と同形／乃 b：漢字「乃」と同形、毛 a：「も」とほぼ同形／毛 b：漢字「毛」の行書体、与 a：「よ」とほぼ同形／与 b：漢字「与」の草書体、留 a：「る」とほぼ同形／留 b：漢字「留」の行書体、礼 a：「れ」と同形／礼 b：「禮」の行書体



計 b　曽 a／b　天 a／b　止 a／b　奈 a／b／c　尓 a／b

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>林田定男 |
| ２．発表標題<br>自筆本研究のミクロとマクロ，そして展開法 |
| ３．学会等名<br>神戸高専学術講演会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>林田定男 |
| ２．発表標題<br>今川了俊自筆資料に見られる用字法 ― 『厳島詣記』の場合 ― |
| ３．学会等名<br>関西大学国文学会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|